國學院大學学術情報リポジトリ

〔紹介〕高久舞著『芸能伝承論 伝統芸能・民俗芸能における演者と系譜』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 泰夫, Oishi, Yasuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000372

紹　介

髙久舞著『芸能伝承論　伝統芸能・民俗芸能における演者と系譜』

大石泰夫

柳田國男が、芸能を民俗として認めないという発言をしていたことはよく知られている。その根拠は、芸能には家元制とか流派というようなものがあって、一個人の判断に伝承が影響を受けるということからであった。また、そもそも民俗伝承は、社会の伝承としてとらえられてきたので、民俗芸能も地域社会が伝承するものとして調査研究の対象とされてきた。

一方、折口信夫は早くから家元にも民俗的意義を認めていた。しかし、折口の芸能論も、基本的には集団としての芸能の伝承に重きを置いていた。芸能史研究の林屋辰三郎は、芸能そのものは個人が身につけた「わざ」であり、特定の個人と不離な関係にあるものとしながら、それが育成される環境は集団的・社

会的であったとしている。このように少なくとも民俗学的に芸能をとらえようとする眼差しには、集団としての伝承という角度からの視座が支配的であった。また、一方で民俗研究とは別の歴史学的方法からの家元研究の蓄積もあるが、それらには民俗的視点はほとんどみられなかった。

しかし、一九九〇年代初頭から、民俗芸能の実践の場に重点を置いた伝承論が主張されはじめ、民俗芸能の伝承の場に個人が大きな役割をもつことが指摘されるようになったが、それはあくまでも集団の伝承に対する個の影響というような視座であり、個の伝承そのものを主題化して、民俗芸能を考えようとするものではなかった。

本書は、近年の民俗芸能研究の実情を踏まえつつ、社会の伝承としての民俗芸能研究に、本格的な個の伝承の視点を取り込もうとした意欲的な研究書である。

筆者髙久舞は、「一中節・邦楽囃子方の家元」「金沢の茶屋街に伝承される素囃子」といった家元や花柳界の芸能という、今までほとんど民俗学的分析がされてこなかったものに対して、そうした分析を試みる。また、一方で「東京都の祭り囃子の流派」の分析や、「秋田県鹿角市の花輪ばやし」といった、民俗学が祭礼芸能として社会の伝承として扱ってきたものに、個と集団の芸の特徴を解析するという方法を用いている。

本書には、方法として固まったものが示されているわけではないが、民俗伝承における集団と個の伝承を切り結ぶ新しい伝承論の地平を切り拓く可能性を秘めているといえよう。

（A5判、三九七頁、岩田書院、二〇一七年三月発行、定価八〇〇〇円＋税）